



私にとってロータリーとは

国際ロータリー第2790地区

パストガバナー 南部 裕

(東金RC)

私が東金RCに入会させて頂いたのが1967年7月でしたので、ちょうど31年が経ちました。その間にロータリーを通じて得たものは、計り知れないものがありますが、中でも多くの人々との出会いにより、自分自身が高められ、日常生活や職業人としての生活においても、その質を高めることができたことにはいつも感謝をしています。

出会いは人と人の縁です。出会いによって広がる人生の面白さや楽しさは、何ごとにも変え難いものです。

人と人を結びつけるものは心ですが、人間の心には善意、悪意、そして信頼も不信も住んでいます。善意と信頼が人と人を結びつけるものです。その善意と信頼で付き合える場所がロータリーではないでしょうか。

従って、ロータリーは友情から生まれ、善意と寛容と友愛の心の交歓の場でもあるのです。

言葉を変えて申せば、ロータリーにおいて人と人とを結びつけるものは、寛容であり、機会です。

例えば、週1回の例会は会員相互の親睦の機会を提供しています。同時に異業種の会員から学ぶことができる自己研鑽の機会です。そして、各委員会を通じての活動は他者への奉仕の機会です。このように機会を分かち合うことが、ロータリーでは最も大切なことです。

特に私にとっては望外な地区ガバナーという大役を仰せつかり、地区内ロータリアンの友情に支えられながら、寛容と機会の大切さを身をもって体験できたことは、私の人生においての大きな収穫でした。

さて、ここでロータリーは仲間を愛する人間になるための場所であって、くどくどしたご利益とか、分別くさい物言いをする場所ではない。こんなことを述べているエドワード・カドマン元R. I会長(1985~86年度)の文章をご紹介します。

カドマン氏は、「誰もがこの世を変えようとしてロータリーに入ったのではあ

りません。大部分の人は仲間が広がる機会を求めて入会したのです。ロータリーの深い影響はゆっくりとやって来ました。私たちはゆっくりその精神に身を浸していったのです。ロータリー精神は一言では表現できないけれども、友情それから地域社会への努力、あらゆる人の職業の理解、仲間への愛を含むものであります。入会は派手なものではなく、平々凡々としたものでありましたが、徐々に変化が起こり、単なる人であることからロータリアンへの変身が始まりました。酔生夢死の生涯から、意義のある運動を援助する方法を見つけ出した人の生涯へと移っていったのです。超我の奉仕について学び、信じたときに善の網の中に取り込まれました。ロータリアンは生まれるものではなく、かくして作られるものなのです。ロータリアンに変身してゆく、ゆっくりした経過そのものに大きな価値があるのであります。……」一部分をご紹介しましたが、実に味わい深い文章ですし、私にとっても実感として受けとめています。

私の今までのロータリーを通じての体験の中から思うことは、入会時の初心を忘れることなく常に今よりも良くなるよう、今よりも思いやりのある人間になるようという気持ちを持っている人にとっては、ロータリーは魅力のある組織ですが、そうではない人にとっては、まったく縁のない組織であると思います。

いずれにしても、ロータリーは誕生から93年の歳月が経ちました。この間、時代の変遷につれて幾多の苦難をのりこえて、先人たちがいる時は激論を交わし、ある時は規則を改正し、その英知と行動力によって今日の隆盛を見ることができたのですが、一方ではロータリーの原点がおざなりになりつつあることも事実です。ロータリーはこれで良いのかと杞憂しています。

思うままに述べてみましたが、私にとってのロータリーとは、基本的には毎週の例会への出席だろうと思います。

例会の本質についての考え方は、会員それぞれお持ちでしょうが、ポール・ハリスは、「親睦の中にロータリーはない。奉仕の中にロータリーはない。親睦プラス奉仕の中にロータリーがある」と述べていますが、冒頭で述べたように善意と信頼により親睦が深まり、心の結び合いで奉仕の心も育ちます。従って、忘れかけていた奉仕の温かい心と呼び覚ます場所と時間を提供してくれるのが例会です。

ロータリーは地域における人材の森です。とはいっても一人ひとりはその道のベテランでも、広い世間から見れば限られた範囲での経験者であるにすぎません。いつも謙虚に、自己研鑽に努める人こそ、真に心の豊かな人物であると言えるでしょう。われ以外、皆わが師です。ロータリーは、私にとって終生の学び舎です。